



大野城市の文化財
第 52 集



白木原ベース返還から 50 年。
大野城市市制施行から 50 年。

かつて、大野の町にアメリカがあった。



2022

大野城市教育委員会



序

大野城市には、国指定特別史跡大野城跡、水城跡などたくさんの遺跡や地域の暮らしが育んできた様々な文化財が残されています。本市では毎年、文化財調査を実施しており、調査の内容を広く市民の皆様にご覧いただくために、年に1冊ずつ『大野城市の文化財』を刊行してまいりました。

本書はふるさと文化財課が令和2年（2020）に大野城心のふるさと館で行った「大野城市の戦争と暮らし」の関連イベント「米軍板付基地の思い出を語る」と、令和3年（2021）の「戦争の記憶展」で実施した聞き取り調査の内容をまとめたものです。調査にご協力いただいた7名の市民の皆様にご心から感謝申し上げます。

板付基地といえば、私が大野小学校5年生だった昭和47年（1972）、白木原商店街（通称；白木原ベース通り）の奥にあった板付基地（春日原住宅地区）が返還になりました。その頃の白木原商店街のお店は、英語の看板で店のしつらえや店構えもおしゃれで、「テレビでみる外国のお店みたいだ。」と思っていました。米軍ハウスに住んでいる同級生の家に遊びに行くと玄関の扉は二重で靴を脱ぐ土間がなく、いきなりフロアになっていました。トイレとお風呂が一緒になっていて、洋式トイレ。和式トイレしか使ったことがなく、どうやって使うのだろうと困惑したことを憶えています。小学6年生の時、板付基地の跡地に大利小学校ができ、大野小学校から分離しました。それまで同級生たちのお別れ会をして、大利小学校まで見送りに行きました。

その後、大野中学校の生徒の時、白木原商店街の店で「サイズが合うなら買えば？」と勧められて、初めてジーパン（リーバイス 501）を買い、アメリカの生活を体験した気持ちになりました。中学3年生の時に、今度は大利中学校ができて分離することになり、小学5年生の時と同じように大利中学校に行く同級生たちの見送りをしました。

令和4年（2022）は、板付基地（春日原住宅地区）の返還と大野城市市制施行から50年の節目を迎えます。戦後生まれの人口が8割となり、太平洋戦争や大野城市の戦後復興を語る上で欠かせない基地の記憶も年月とともに失われつつあります。本書で掲載した基地の記憶が後世に引き継がれ、これからの大野城市の平和教育やまちづくりに、少しでも役立てていただければ幸いです。

令和4年3月31日

大野城市教育委員会
教育長 伊藤 啓二

目 次

1. 板付基地と白木原ベース通り	1
2. かつて大野の町にアメリカがあった	7
デリバリーボーイが見た基地の風景	井上 善久さん 7
板付基地の思い出	上野 謹爾さん 9
メイド宿舎でモーニングコーヒー	小谷 文昭さん 13
コラム～板付基地の生き証人「米軍ハウス」～	14
「満壽美をトランクケースに入れてつれて帰りたい」	池田 満壽美さん 15
白木原は開けた町だった	松島 一寅さん 19
商売では金メダルだったと思う	藤武 肇さん 21
ラーメンか、チャーハンか、スパゲッティ	田中 泰彦さん 23
3. 白木原ベースの撤収から 50 年、大野城市市制施行からも 50 年	25

凡 例

1. 本書は令和2年（2020）10月6日～11月29日に大野城心のふるさと館で実施した企画展「大野城市の戦争とくらし」の関連イベント「米軍板付基地の思い出を語る」と、令和3年（2021）7月13日～10月24日の「戦争の記憶展」、米軍ハウスの^{しっかい}悉皆調査、および聞き取り調査で市民の方々から証言いただいた内容をまとめたものです。
2. 図1の地図は、国土地理院の1/25,000の地形図『福岡』・『篠栗』・『福岡南部』・『太宰府』・『二日市』を使用し、編集・加工して掲載しています。
3. 本書に掲載したイラストや写真、また聞き取り調査につきましては、下記の方々ならびに機関からご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。
（五十音順、敬称略）池田 満壽美、井上 善久、上野 謹爾、貝田 学、春日市教育委員会、春日ベースハウスの会、小谷 文昭、田中 泰彦、林 潤也、藤武 肇、松島 一寅
4. 本書の作成は、聞き取り調査や書き起こし作業、作図等をふるさと文化財課啓発・整備担当職員の鮫島 由佳、深町 美佳、山村 智子が分担して行い、表紙デザインは深町、編集は山村が行いました。

1. 板付基地と白木原ベース通り

昭和 20 年（1945）8 月 15 日、日本はポツダム宣言を受諾し、太平洋戦争は終結しました。同年 9 月 22 日、ジープとトラック 7 台に分乗した将校 8 人、兵 20 人のアメリカ海兵隊第 5 師団第 28 連隊先遣隊が旧日本陸軍の席田飛行場に到着しました。同年 10 月に板付基地（ITAZUKE AIR BASE）と命名され、席田飛行場はアメリカ軍管轄の板付飛行場になりました。板付基地は板付飛行場を中心に、ブレディ基地（雁ノ巣）、平尾射撃場、古賀・新宮訓練場、脊振山航空管制通信所、それに春日原住宅地区（通称；白木原（春日原）ベース、以後、白木原ベースと記す）などの附属施設（ANNEX）を含むアメリカ軍の広大な空軍基地になりました。

アメリカ軍の住居エリアとして整備された白木原ベースは、春日村（現在の春日市）の軍需工場・小倉陸軍造兵廠春日製造所と、地続きだった大野村大字上大利（現在の大野城市上大利）の田畑や墓地等をアメリカ軍が宿舍用地として買収し、造成しました。白木原ベースの面積は 156 万 4,700m²（大濠公園の約 4 倍）におよび、春日村部分が 75%、大野村部分が 25%を占めていました。

白木原ベースの工事は昭和 21 年（1946）に始まり、翌年にはほぼ完成し、約 900 戸の家族用住宅（ディペンデントハウス）や宿舍が造られました。ベースの中には住宅以外に将校クラブや空軍クラブ、ボウリング場や野球場、スケート場、体育館、プール、モトクロスバイクレース場などのスポーツ施設、映画館や劇場、ビリヤード場などの娯楽施設、レストランや銀行、病院、教会、F E N（極東放送）のスタジオもありました。食糧販売所（板付スーパーマーケット、後にカミサリー）にはアメリカから空輸された缶詰や肉、野菜などが陳列され、B X（売店）には宝飾品や家電製品まで販売されていました（図 2）。ベースは鉄条網が巡らされたフェンスとコンクリートの高い壁で仕切られていて、基地の中で働く日本人従業員と基地開放日（独立記念日等）以外、自由に立ち入ることはできませんでした。ベースはまさに「フェンスの向こうのアメリカ」でした。

ベースへの出入りは北門（ノースゲート）、東門（イーストゲート）の 2 つのゲートがあり、春日原側に面した北門が正門でした。しかし、ベースがほぼ完成した昭和 22 年（1947）以降、東門から西鉄白木原駅に延びる道路沿いには、アメリカ兵相手のバーやレストラン、クリーニング店、テイラーなどが次々と出店しました（図 3）。田畑広がる農村地域だった大野村には終戦からわずか数年で、アルファベットで書かれた横文字看板が掲げられ、夜になるとネオンが輝く「白木原ベース通り」ができ上がっていました。

昭和 25 年（1950）6 月に朝鮮戦争が勃発し、板付基地に駐留するアメリカ兵が大幅に増員され、ベースの外にもアメリカ兵が使用する住宅（オフベースハウス）が建てられるようになりました。こうした住宅は土地を持つ大野町の住民が建てたアメリカ仕様（フローリング、洋式水洗トイレ、シャワー等）のハウスで、地元では「米軍ハウス」と呼ばれていました。日本人向けの借家に比べて 2～3 倍の家賃が取れた米軍ハウスはたくさん建てられました。同年 10 月に大野村は人口が 1 万人に達し、大野町が誕生しました。

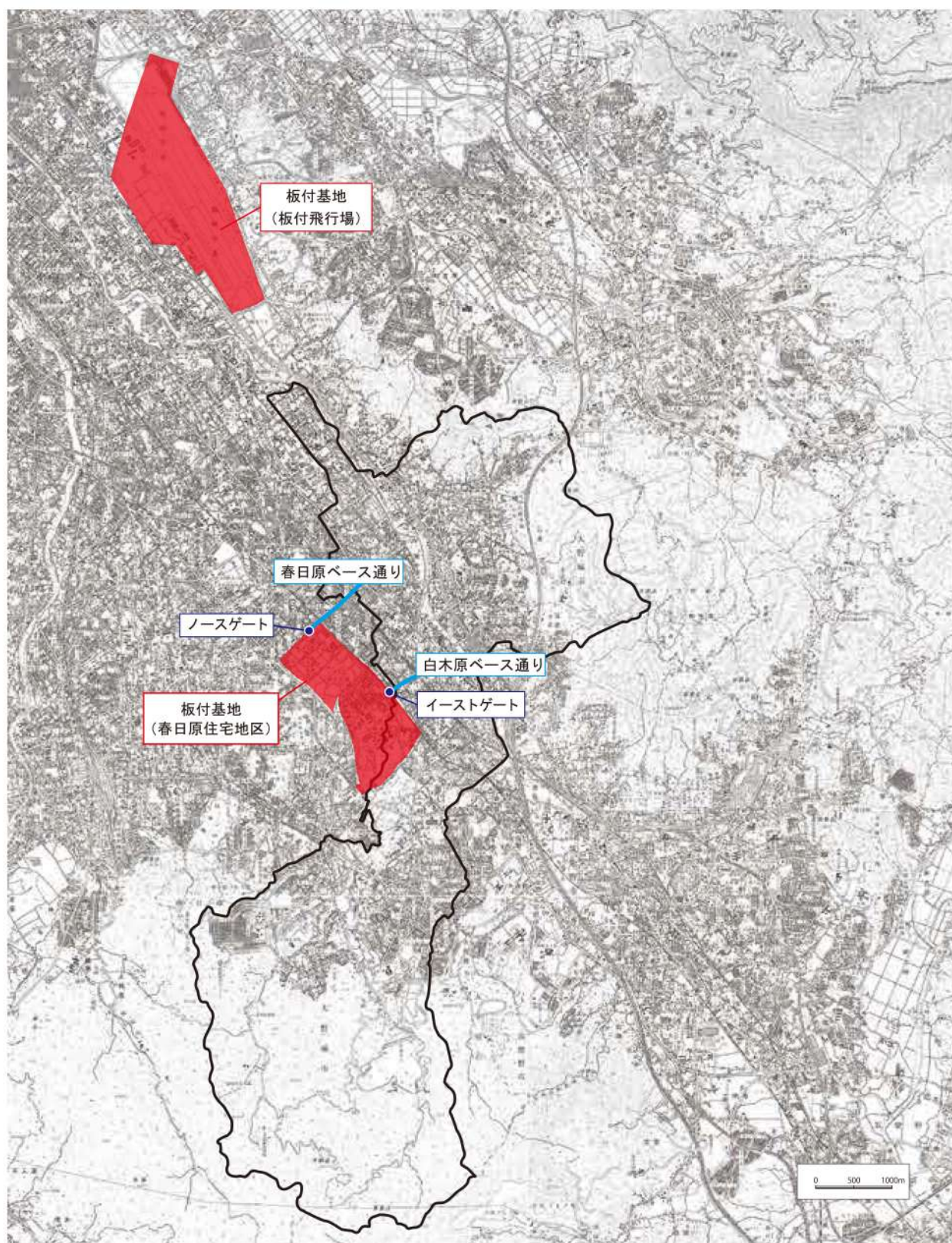
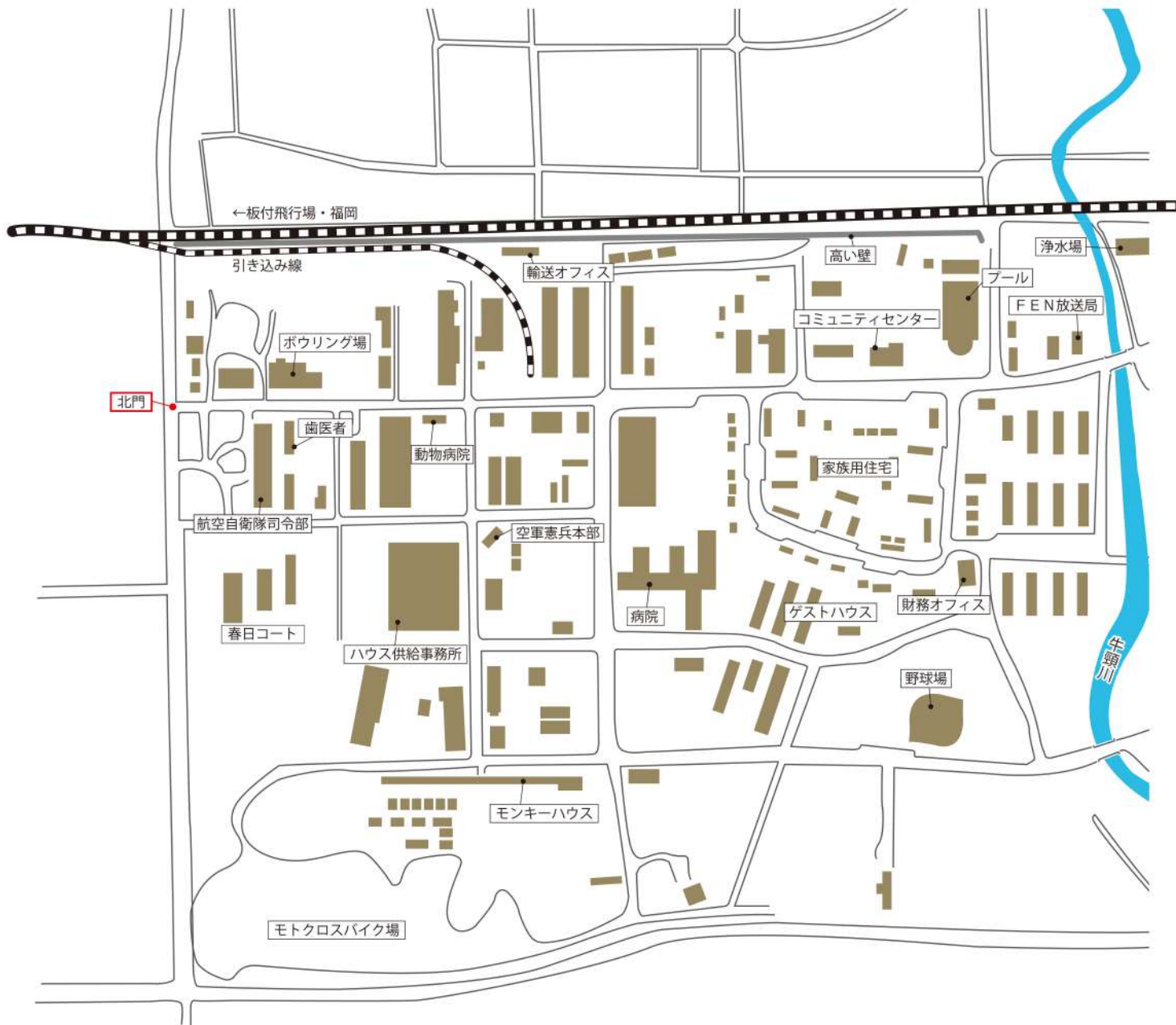


図1 板付基地位置図 (1/75,000)

米軍板付基地 春日原住宅地区内配置図



インヤード資料(春日市教育委員会所蔵)、『春日市史 中巻』、『大野城市史 下巻』、『ゼンリンの

図2 板付基地(春日原住宅地区)施設位置図



住宅地図 大野城市 春日市 那珂川町』(昭和 47 年)、聞き取り調査をもとに作成

西暦	月日	板付基地に関する主な出来事	世界の情勢
1944 (昭和19)	2月	帝国陸軍航空部隊の席田飛行場として建設を開始	
1945 (昭和20)	5月	席田飛行場滑走路2本が完成	ドイツ、連合国軍に降伏 (5/7)
	6月19日	福岡大空襲	
	8月15日	ポツダム宣言受諾(終戦)	日本がポツダム宣言の 受諾を表明(8/15)
	9月3日	米軍の九州進駐開始	
	9月22日	米海兵隊第5師団第28連隊の先遣隊、席田飛行場に到着	連合国軍最高司令官総 司令部 (GHQ/SCAP) 設置(10/2)
	9月	米進駐軍、福岡精工所・中央兵器工場を接收(昭和26年に解除)	
	10月	第315混成空港団、板付飛行場に駐留	
	10月	米軍が席田飛行場を接收、米第五空軍の管轄となり板付基地と命名	
	10月7日	大佐バーカーを司令とした部隊が進駐	
	"	米進駐軍、小倉陸軍造兵廠春日製造所・九州飛行機雑餉隈工場を接收	
	12月8日	米進駐軍、九州兵器雑餉隈工場を接收 米軍機、福岡市二又瀬を経て九大農学部 の 松林に墜落し、機体を焼失	
1946 (昭和21)	8月	少佐以上の家族30世帯が板付に到着、基地外の接收家屋に住む(オフ・ベース) 春日原ベースの工事開始(翌年にほぼ完成)	第1次インドシナ戦争勃 発(12/19)
1947 (昭和22)	3月17日	福岡市大井町の女性が飛行場付近を通行中、標的吹き流しのロープに引っかけられて片足を切断 第一期アクネス(付属基地)工事が終了し、ベースツーの部隊が移動	
1949 (昭和24)	1月20日	糟屋郡須恵町の15歳の少女が自宅で飛行機の流れ弾により左肘関節に貫通銃創を負う	朝鮮戦争勃発(6/25)
	6月	筑紫郡大野村田屋、南西1500mの場所で飛行機が墜落、乗員2名が死亡	
	12月	飛行場外道路通行中の東光中学2年生が、飛行中の機体からガソリンを浴び引火、全身やけどで死亡 大野村田屋、東南方150mの田んぼで農作業中に1名機銃弾により膝関節貫通銃創を負う	
1950 (昭和25)	3月6日	筑紫郡筑紫村の民家裏庭にジェット機が墜落し炎上、家屋・家財・畑に被害を受ける。乗員死亡	
	4月	江頭匡一が春日原ベース内でPX(売店)の指定商人を始めたことをきっかけにキルロイ特殊貿易株式会社(現:ロイヤル株 式会社)を設立	
	5月	大野村田屋東南方、宇美道に飛行機墜落、乗員2名が死亡	
	6月25日	朝鮮半島で戦争が勃発し、板付基地は爆撃・輸送の第一線基地となる	
	6月	福岡市二又瀬より約400mの田に飛行機が墜落	
	10月1日	町制を施行、筑紫郡大野村は筑紫郡大野町となる	
1951 (昭和26)	2月3日	福岡市二又瀬より約200mの麦畑にジェット機が墜落、乗員死亡	サンフランシスコ講和条 約締結(9/8)
	4月	滑走路南側の月隈地区が接收され、滑走路の延長及び諸施設の緊急拡張工事が行われる	
	5月5日	糟屋郡志免町の麦畑にジェット機から500ポンド爆弾が落下、爆発し大穴を開ける	
	5月10日	福岡市二又瀬の民家にF-86が墜落、5戸全焼、住民11名が死亡。当時この種の事故に対する損害賠償制度はなく、国は 見舞金64万円を交付	
	5月	大野町田屋地区苗代田に補助タンク落下、被害者1名	
	10月25日	日本航空、戦後初の民間航空の滑走路線(福岡-大阪-東京)が営業開始	
1952 (昭和27)	4月28日	サンフランシスコ講和条約により連合国の日本占領が終了、板付基地と春日原住宅地区は米軍の「無期限使用」となる	サンフランシスコ講和条 約により被占領解除 (GHQ廃止、日本の主権 回復)(4/28)
	9月20日	福岡市城西橋電停付近にジェット機が空中分解して墜落、1戸全焼、1名死亡、簗島・高宮に部品が落下	
	12月3日	福岡市議会臨時会で「板付飛行場の軍事基地撤退並びに国際空港指定についての決議文」を議決 福岡市二又瀬から200mの畑中で、ジェット機の吹き流しが高压線を切断	
1953 (昭和28)	3月	大野町田屋南方150m補助タンク落下、油が散乱、被害者4名	朝鮮戦争の休戦成立 (7/27)
	3月	大野町田屋東南方1000m御笠の森で飛行機墜落、乗員1名死亡	
	3月	在日米軍、日米合同委員会に対し、博多湾を水上機の発着場としての使用を申し入れる	
	6月	福岡市二又瀬の民家付近に大型爆弾(不発)が落下、大穴を開ける	
	9月4日	福岡市下月隈にF-80が墜落、民家3戸に被害	
1954 (昭和29)	3月9日	福岡市下臼井の田にF-84が墜落、農作物に被害	陸上自衛隊創設(7/1)
	5月11日	福岡市下臼井の田にF-86が墜落、農作物に被害	
	8月14日	滑走後浮上できず、福岡市下臼井の田に突っ込む	
	10月	大野町田屋北方500m御笠川の中に補助タンクが落下	
	7月	米軍、板付基地拡充のため福岡市上空における高射砲隊の実弾射撃を申し入れる	
	11月	米軍、韓国引き揚げに伴い在日空軍が増強されるのを機に、板付飛行場から日本航空の引上げを非公式に要請	
1955 (昭和30)	3月3日	福岡市二又瀬にジェット機が墜落、送電線を切断	ワルシャワ条約機構結 成、冷戦激化(5/14)
	4月	福岡市二又瀬より200m付近に墜落、高压線を切断	
	6月15日	着陸中のF-86が高压線に触れて福岡市二又瀬に墜落、農作業中の主婦が機体にはねられて即死、農作物・送電線に被害	
	6月25日	板付基地移転促進協議会の発会式が行われる	
	7月4日	米極東空軍副司令官、福岡市長宛に「板付基地周辺地域に新たに13か所の高射砲陣地の増設」の協力要請	
	7月10日	大野町白木原の民家に米兵が花火を投入し家人が全治1週間のやけどを負う	
	11月12日	軍事基地移転促進の市民大会が行われる	

西暦	月日	板付基地に関する主な出来事	世界の情勢
1956	1月27日	福岡市上月隈の田に離陸中のF-86が墜落、農作物に被害	日本が国際連合に加盟 (12/18)
(昭和31)	1月29日	飛行場南側で着陸中のF-86が墜落	
	5月	大野町田屋東方300m飛行機墜落、死者なし	
	9月19日	在日米軍、第5空軍の防衛力を整備する目的で、小型原爆搭載可能なF-100スーパー・セイバー・ジェット戦闘機を11月に板付基地へ配属することを発表	
	9月29日	福岡市議会、F-100の配属を阻止するため「F-100ジェット機板付基地配置に反対する決議文」を議決	
	10月11日	F-86が着陸の際、前部を大破して炎上、飛行場は一時使用不能となる	
	11月14日	F-100戦闘爆撃機6機、板付基地に配属	
	11月17日	春日原ベース正門前で二等兵が飲酒運転事故、1名死亡	
1957	1月	米兵やその家族1880人が基地外に住む	
(昭和32)	2月26日	C-47輸送機がF-100と空中接触して福岡市竹下西町の畑に墜落、付近の住宅2戸が全焼1戸半焼、乗員3名即死	
	10月23日	糟屋郡志免町の農家庭先に補助タンクが落下、屋根などを破損	
	11月13日	福岡市吉塚5丁目の民家にF-86の補助タンクが落下、家屋が全壊して主婦1名が死亡、2戸に被害	
1958	2月	ジェット機の爆音と頻発する航空機事故により、2月から4月にかけて福岡市二又瀬東町の住民の集団移住が行われる	
(昭和33)	5月20日	福岡市金隈にT-33が不時着、農作物に被害	
	5月	「博多どんたく」が白木原ベースを訪問、米兵も参加し基地内をねり歩いた	
	6月15日	春日原ベースの中学生と大野中学校の生徒による親善野球大会が行われる	
1959	2月26日	福岡市名島の九電テニスコートと町工場に補助タンクおよび連結器が落下、工場の屋根などに被害	
(昭和34)	12月	F-102ジェット戦闘機、板付基地に配属 板付基地奨学会の設立(昭和36年まで) 板付基地の日本人離職者が「共同タクシー」を設立	
1960	5月28日	福岡市老司の民家など5カ所に補助タンクおよび部品が落下、家屋・農作物・電線に被害	日米相互協力及び安全保障条約調印(1/19)
(昭和35)			
1961	5月7日	第五空軍司令官、水爆搭載用の最新鋭機であるF-105を板付基地に配置すると発表	ベルリンの壁を建設 (8/13)
(昭和36)	5月11日	福岡市当局、政府並びに米国関係機関に核兵器の持ち込みにつながるF-105の板付基地配置反対を公文書で申し入れる	
	5月12日	F-105の一部14機、沖縄より板付基地に到着	
	5月23日	福岡市議会臨時会「米軍ジェット戦闘爆撃機F-105の板付基地配置に反対する決議案」を議決、即時撤去を関係方面に要請	
	8月15日	離陸中のF-102が飛行場北端で炎上	
	9月14日	福岡市志賀島の船だまり西側防波堤にF-100が墜落、排砂管や電線に被害	
	12月7日	福岡市香椎字堀川の民家にF-100が墜落、母子ら4名焼死、民家3戸全焼、1戸半焼	
	12月15日	福岡市別府団地に佐世保基地の米海軍双発探索機からソナー(潜水艦探索筒)が落下	
1962	2月28日	ジェット機の衝撃音で九大医学部耳鼻咽喉科の窓ガラス百数十枚が破損	キューバ危機(10/15～28)
(昭和37)	7月25日	福岡市にある国鉄吉塚駅構内に模擬爆弾が落下	
	7月	運輸省航空局「板付飛行場を国際空港に昇格させるための整備拡張計画」を発表 北側拡張、福岡市が基地拡張と認める議案を議会に提出、反対運動が起こる	
1963	1月18日	離陸直後F-100がコースを外れ、空港ターミナル前のエプロンに墜落して爆発、1名負傷、事務所などに被害	ケネディ大統領暗殺事件(11/22)
(昭和38)	11月7日	ミラー基地司令官、航空機の騒音について、緊急時以外の夜間整備・飛行は行わないと発表	
	12月23日	23日から26日にかけて、大野町議会「板付基地の縮小又は廃止に対する反対陳情」を行う	
	12月31日	日米両国政府、在日米空軍の一部引き揚げおよび配置替えについて発表	
	12月	米国のベトナム介入が本格化したことにより板付基地は中継基地となる	
1964	2月29日	板付基地のF-100ジェット戦闘機18機、グアム島へ移動	東京オリンピック(10/10)
(昭和39)	3月16日	大野町議会で「大野町駐留軍関係離職者対策協議会設置条例」の制定について論議される	
	4月	基地周辺のテレビ・ラジオの被害対策として、放送受信料の減免措置が実施	
	5月4日	板付基地の縮小によりF-105が横田基地への移駐を開始、それに伴い日本人労務者が大量解雇される	
	5月8日	軍人および家族帰国第一陣148人が板付飛行場から米本土に出発	
	6月29日	再編成計画により、一部の米軍人とその家族の本国引き揚げが完了する	
	6月	全日空が福岡-名古屋間の新航路を開設	
	12月3日	基地のカミサリーで働いていた斎田弥太郎が鍋島市右衛門と共同で株式会社丸共ストア(現:マルキョウ)を設立 「福岡県駐留軍離職者センター」を設立 板付基地の日本人離職者が「きょくとうクリーニング」を創業	
1968	1月23日	米海軍の情報収集艦ブエプロ号が北朝鮮による拿捕事件が発生、米軍機が多数板付基地に飛来する	
(昭和43)	6月2日	F-4ファントムが九大工学部に建設中の電算機センター(福岡市東区箱崎)に墜落、炎上	
1971	5月	春日原住宅地区の部隊は福岡市東区西戸崎の博多基地に駐留している第6348基地中隊に移転	
(昭和46)			
1972	4月1日	市制施行、福岡県筑紫郡大野町は福岡県大野城市となる	アメリカから日本へ沖縄返還、沖縄県発足(5/15)
(昭和47)	4月1日	板付米空軍基地返還式が行われる	
	5月	「板付空港」が「福岡空港」に改称される	
	6月30日	米軍春日原住宅地区の返還式が行われる	

2. かつて大野の町にアメリカがあった

デリバリーボーイが見た基地の風景

井上 善久さん（大野 城市上大利在住）

昭和33年（1958）、高校1年生の頃、基地で働いていた同級生に誘われて、基地内のカミサリーで働くようになった。カミサリーが建っていた場所には木製の大きな電柱があって、その電柱が今でもJR大野城駅前に残っていて、それを見ると懐かしくなる。

カミサリーの裏手にはプラットホームがあって、アメリカから空輸された野菜や冷凍食品、缶詰なんか引き込み線で運び込まれていた。プラットホームはJR大野城駅西口を出て、左手側の駐輪場あたりにあったかな。プラットホームとカミサリーは屋根で繋がっていて、到着した荷物を大きな冷凍庫に入れたり、倉庫に運んだりした。その後、カミサリーの棚に食料品を陳列したり、整理したり。クリスマス前には冷凍された大きな七面鳥がたくさん入荷してきて、一羽まるごと飛ぶように売っていた。カミサリーで驚いたのが、瓶詰でたくさん売られていたベビーフード。日本のように離乳食を手作りしない、アメリカは合理的な生活をしているなあと思った。今の日本の食生活では2～3日置きに買い物をするけど、基地では1度に1週間分の食材を大量に買うのが当たり前。カミサリーでの仕事は今のスーパーマーケットのような仕事だったけど、客が購入した商品を車やハウスまで配達するデリバリーボーイもしていた。カミサリーのレジは今のコストコみたいにベルトコンベア式になっていて、デリバリーボーイは客が購入した商品を大きな紙袋に手際よく袋詰めしていく。紙袋の底には缶詰や瓶詰などの重いものを入れて、上のほうにはクラッカーなど軽いものを詰める。毎回、大きな紙袋を2つ抱えて、客の自家用車まで持っていくまでが仕事。このデリバリーボーイをするとチップがもらえる。50セント札、良い時は1ドル札を買っていた。1ドルが360円の時代で、10回もポーターをすれば、2,000～3,000円になるけど、ドルでもらうので、換金できない。それにもらったチップは、カミサリーの控室の壁にチップボックスという箱が置いてあって、そこにを入れるようになっていた。そこから自分達の給料が出ていたようなもんだけど、カミサリーで働いて少し経つと要領が良くなって、チップを少しずつ貯めた。アメリカ兵の日本人の奥さんやその家族も白木原や春日原に多く住んでいた。そこで日本人の奥さんに頼



カミサリー外観写真

春日市教育委員会所蔵



カミサリー内部の写真

個人蔵

んで、貯めたチップを渡して、基地でジーパンを買ってもらった。カミサリーで購入した商品は車に運ぶ以外に、基地の外の米軍ハウスへ配達もしていた。配達の際は客から配達方面、白木原だったらS、春日原だったらKと、ハウスナンバーを聞いて、紙袋に書いておく。ワンボックスのトヨエースのトラックに紙袋を配達場所の遠いところから奥に詰めていって、最後に自分が紙袋が倒れないように荷台に乗り込んで出発していた。白木原や春日原、遠い所では前原（現在の糸島市）のほうまで配達に行っていた。基地の中には、日曜日にちょっとした日用品が買える、キオスクみたいな売店があった。日曜日は売店で働いたり、半年に1～2度、カミサリーの独身兵の職員と一緒に久留米の聖母園に届けに行く慈善活動もしていた。カミサリーの食料品をアメリカ軍の幌付きのトラックに乗せて、昼頃に聖母園に到着した後、子供達とランチを食べた。帰りに高良山へ寄り道してアメリカ兵達と遊んだりして楽しかった。カミサリーでは月給6～7千円くらいもらえた。当時の大学卒の給料が1万円だから、高校生のアルバイトでは結構な収入だった。

カミサリーを運営している会社はデリバリーに関わる仕事をいくつもしていたみたいで、牛頭川よりも北側のオフィスエリア（南側はハウジングエリアと呼んでいた）に大きな倉庫があり、中にはアメリカから空輸されてきたソファやベッドなどの家具、洗濯機、フォークやスプーンなどの食器に至るまで様々な生活用品が保管されていた。自分はその倉庫からオーダー表を見ながら品物を揃えて箱詰めして、基地の外の米軍ハウスに届けるまでが仕事だった。日本に赴任してくるアメリカ兵やその家族は着る物以外何も持たず、手ぶらでやって来ても日本でアメリカそのものの生活を始めることができるようになっていた。

春日原の航空自衛隊基地内にのこぎり屋根の建物が残っていて、板付基地だった時には白木原や春日原に飲みに行き、問題を起こしたアメリカ兵たちが収容される牢屋「モンキーハウス」だった。たまに収容されているアメリカ兵がMP（憲兵）2人に監視されながら出て来て、ゴミ拾いやらをさせられている姿を見ていた。夕方5時になると、板付基地の司令本部に掲揚されているアメリカ国旗が降ろされ、アメリカ国歌「星条旗 (The Star - Spangled Banner)」が流される。その曲が流れると、アメリカ兵は司令本部に向って敬礼をし、兵士の家族たちも項垂れてじっとしていた。車を運転している人と基地で働く日本人はじっとしてなかったけど、基地の中ではそういった日常があった。



久留米聖母園にて
井上 善久さん所蔵



久留米聖母園でランチ
井上 善久さん所蔵

いたづけ き ち おも で 板付基地の思い出

うえ の きんじ おお の じょう し みなみ が おか
上野 謹爾さん(大野 城市 南ヶ丘在住)

私は1957年に神戸市外国語大学に進学したが、当時、英語会話の教授はイギリス出身の先生が2名、アメリカ出身の先生が1名の3名のみであった。当時の大学の授業は1クラス約40人と人数が多くて、1時間半の英会話の授業で一人が4～5分話せばいいほうだった。なんとか自分の将来に備えて、しっかりとした実用的な英会話を習得したいものだと考えていた。

生まれの福岡には米軍のベースキャンプがあるではないか、そこで英会話の勉強ができるはずだと思って、大学の春休みに福岡に帰省した時に春日町役場に行った。すると「レイバー（労働者）としての仕事はあるが、勉強したい学生を受け入れてくれるところを紹介するのは難しい。」と門前払いされた。そこで、今度は福岡県庁に行ったら、「ベースの中は戦時体制の構えですよ。学生が勉強したいなどもってのほかだ。」とこちらも門前払い。

若気の至りというか、なんとかひとつやってみようと思って、ノースゲートに行った。ゲートの中には二人のG I がいて、一人はゲートの建物の中にいて、一人はカービン銃を肩にかけて外で警備をしていた。G I が「何をしに来たんだ。」と聞くので、「ベースコマンダー（司令官）の名前と住所を書いてくれ。」と答えると、「なぜ、ベースコマンダーの名前や住所を聞きたいんだ。」と言われたので、「私は学生で、大学の授業だけだと英会話の勉強が充分だと思えない。なので、基地の中で勉強がしたいんだ。」と言うと、意外にもあっさりと司令官の名前と住所を書いたメモをくれた。

さっそく司令官に直訴状を書いて送った。するとすぐに折り返し、司令官から「おいで」と手紙が来まして、喜び勇んで基地に行った。ゲートで司令官からの手紙を見せると、G I は敬礼して司令本部までつれて行ってくれ、司令官室で司令官から面接を受けた。

私は「アルバイトといってもお金はいらなないんだけど、自分の将来に備えて英会話の勉強をしたいのが目的です。食堂でも炊事場でもどこでもいい、皿洗いでもなんでもいいから勉強が出来る機会が欲しい。」と話すと、司令官は「あなたはまちがっている。英語を



イーストゲート（東門）
春日市教育委員会所蔵



司令本部の外観写真
春日市教育委員会所蔵

勉強するのであるなら、そんなところで勉強したのでは本当の英語は勉強できません。英語にもいろいろな言葉、表現の仕方があり、例えば地域や兵隊の言葉、そして将校の言葉は違う。あなたはそういう希望があるならば、オフィサーズの言葉を勉強しなさい。私が指示する部署で勉強しなさい。」ということで、インフォメーションオフィスに行くことになった。オフィスはFEN放送（Far East Network）、それから星条旗新聞（Pacific Stars and Stripes）の編集をする事務所でした。そこにはキャプテン（大尉）、ルーテナント（中尉）、サージャント（軍曹）がいて、日本人の女性2人が働いていました。日本人女性の方は星条旗新聞の原稿を書いたりして、通常の英会話と新聞表現は違うということで非常に簡潔に表現した入稿する前の原稿を見せてくれた。みなさんは非常に親切でいたれりつくせりの待遇でした。そして1週間経った時、アルバイト代を戴いた。

私は大学生でいくらかでも稼ぐと嬉しいし、初めて自分の収入のお金だもんで帰って、夜、食事をするとき「アルバイト代もらったよ。」とオヤジに言った。するとオヤジは急にだまって、しばらくして「おまえは何しに板付に行っているんだ。向こうは先生だろう。お前の話を聞いていると、司令官か何か知らないけど、インフォメーションオフィスで下にもおかない扱いをしてもらって、何を勘違いしているんだ。金を稼ぎに行っているのか、勉強しに行っているのか、どちらだ、自分のやっている事の目的をはっきりしろ！そんな気持ちじゃダメじゃないか！明日、全部返してこい。」と言われた。

次の日、キャプテンのところに行って「このお金は返します。」と話をし、金を返した。するとキャプテンはキョトンとして「Why? なぜ返すんだ。」と聞かれたので、「昨日、オヤジと話をしたけど、勉強しに行っているなら金はもらうべきではないという、オヤジの気持ちは分かります。このお金は返します。」とキャプテンに話して、お金を返した。するとその話がすぐ司令官に伝わりまして、司令官がえらい感心して「それなら彼は今日から、我々のゲストにしよう。毎日昼飯は我々と同じ将校クラブで無料で共に楽しく食べることにしよう。キャプテンは毎日、責任を持ってMr. UENOをLunchにつれて来い。」と。ここらあたりでやはりオヤジもオヤジなんだけど、そんなオヤジの気持ちを理解してくれた司令官という人の、ものの考え方に強く感激した。

それから毎日毎日将校クラブで食事をさせてもらった。ベースには一般兵士が使う食堂（MESS HALL）があった。MESSは雑多な、ガサガサしたという意味があり、いわゆる兵隊さんたちが食事をかっこむといったイメージの食堂だったが、将校クラブでは食事のマナーも質も、第一級のものだった。日本食にも食事を提供する側にも受ける側にも作法がありますが、将校クラブにも厳格なテーブルマナーがあり、テーブルセッティングの仕方、食事の姿勢等厳しいものがある。この将校クラブでの経験も社会人となって、素晴らしい経験になった。食事の内容も質量ともに豊富で、生まれて始めて経験する食べ物もたくさんあった。ステーキやパン類などのいろんな食事をお腹いっぱい食べた後、デザートでフルーツを食べる人もいたが、みんな、大きなコップでピンク色がかった白っぽい飲み物を飲んでいる。それはミルクシェイクでとてもおいしかった。また片方では、大きなコップで黒っぽくて茶色いサラッとした飲み物を飲んでいた。それは松脂臭いコカコーラで、だけどこれを一回飲むと、その松脂に憑りつかれ、再度コカコーラを飲むのが楽しみ

だった。食事を終えて、ミルクシェイクやコカコーラを飲む時にはリラックスして、いろんな話をしていた。毎回、毎回将校クラブでお世話になり、食事を楽しむ機会を司令官に配慮^{はいりょ}していただいたが、心温まる思い出になっている。

また一番大切だったのが、将校クラブで司令官たちと食事をしていると、へんな日本人がいるなあと思われて、他の将校から「おまえはなんだ。」とあっちこっちから声をかけられる。そこで、「かくかくしかじかで学生で勉強させてもらってて。」と答えていると、自分の話が将校の間でニュースになって広がり、インフォメーションオフィス以外の将校の家に招待されるようになった。子供さんがいない若いご夫婦の将校宅に招待されてお邪魔^{じゃま}するのが面白かった。当時のアメリカ人の夫婦の在り方を日本人夫婦と比べてみるのがとても興味深くて、例えば、将校はズボンの折り目とかがピシッとしてる軍服をきちんと着ている。将校の奥さんが洗濯をした後、「私が洗濯をしているのだから、あなたがアイロンをかけてプレスしなさいよ。」「おれは仕事をして忙しいんだから、プレスしてくれよ〜。」というやりとりをしていて、あ〜こんなところが日本人夫婦と似ているなあ、似てないなあとか思っていた。だんだんネイティブの会話は分かるようになってきたけど、微細^{びさい}なところまで分からないことがあった。ある将校夫婦におよばれして、「晩御飯を食べにおいでよ。ゆっくりしようじゃないか。今晚いらっしゃい。」と言われた。奥さんが作った食事の後、お酒を一杯いただいた。自分は晩御飯をおよばれているのだから家に泊めてくれるのだらうと思っていたが、将校夫婦は「晩御飯もお酒も飲んで、夜も遅くなったけど、あいつ帰らないのかなあ」と思っていたようで。お互いに不思議に思っていたら、夜も更け、とうとう将校夫婦の家に泊まることになった。そのこのハウスにはスペアのベットがないので、ソファに毛布をかけてもらって、「上野さん、すまんがここに泊まってくれ。」と言ってお世話になった。

当時、アメリカ軍の一般的な戦闘機^{せんとう き}がF-86だったが、最先端^{さいせんたん}の戦闘機F-100 スーパーセイバーが導入された。そのF-100 のコクピットにも乗せてもらった。コクピットに乗る前に、シュミレーターで操縦^{そうじゅう}体験をさせてもらった。シュミレーターなのでどんな運転^{かみなり}をしてもいいわけだけど、雷^{かみなり}が鳴ったらや、エンジンが止まったらどういう対応^{こうおう}をしないといけないとかを体験できた。その後、パイロットの航空服を着させてもらって、F-100 のコクピットでも手取り足取り「このボタンは●●だ。ただし、この座席^{ざせき}の横のレバー^{れーばー}だけは絶対にさわるなよ（緊急脱出^{きんきだつしゅつ}用レバー）。」と懇切丁寧^{こんせつていねい}に説明してくれた。その様子を星条旗新聞にも載せてもらいました。こういう学生で英語の勉強でかくかくしかじかで勉強していると。非常にいい経験をしたと思う。1958～1960年の大学2～4年の春休みと夏休みの期間はぜんぶ基地に行ってますよ。ちょっと普通の人とは異なる、経験ができたんじゃないかと思う。

大学4年の最後に、家に帰ってオヤジとオフクロに「これまで大変お世話になったから、司令官たちに御礼^{おれい}がしたい。」と相談した。すると、「それじゃあ、家でおもてなしをするから、ご招待しなさい。」と言ってくれた。そこで、司令官ご夫妻、インフォメーションオフィスのキャプテンご夫妻、ルーテナントご夫妻、サージャントご夫妻の8名を久留米^{くるとめ}の実家にご招待した。オフクロが日本の懐石料理^{かいせきりょうり}をコースで作ってくれて。座敷^{ざしき}の上座^{かみざ}に

司令官たち8名に座ってもらい、オヤジが下座に座った。オヤジは私を隣に座らせ「俺が今からみなさんに感謝の言葉を言うからおまえが通訳しろ。」と言って、「みなさんのご厚意に心から感謝します。ありがとうございます。本人もものすごい助けになったと思います。いい思い出になったと思います。」と感謝と喜びを言ってくれた。その言葉に司令官たちはえらいびっくりしてましてね。たまたま実家は古い家で先祖代々の庭を大切にしていたし、純日本の家屋でおそらく喜ばれるんじゃないかと。日本の家族の在り方を全部みてもらって、非常に向こうも喜んで帰った。ところがこれが困ったことに、アメリカ人夫婦たちが乗って来たフルサイズの横も縦も広い大きなアメリカ車が4台も久留米の田舎道をゾロゾロやって来たもんで、近所のみんなはびっくりしゃっくり。「上野さんのところ、何があったんですか。」と騒ぎになった。そういう締めくくりになったけども、貴重で感謝の気持ちでいっぱいになった。

基地での経験で、ちょっとした考え方や心からでた言葉は非常に大切だなあと思った。ベースコマンダーが私の手紙を見たり、お金を返すと聞いたとき、どう考えたのか。人の考え方を的確にとらえること、それが心のふれあいだと思う。それは世界中どこに行っても同じだと思う。ここの経験で米軍の軍の規律は大変厳しいものが当然ある。それと離れて、米国人の個人個人としての良さを肌身で感じられてよかったなと。ベースでお世話になった将校クラスの人達は3年間の間、転勤がなかった。アメリカの領事館に行って、名前と住所が分かれば、亡くなっている人も多いと思うけど、会いに行きたいなと思っている。



F-100 スーパーセイバーのコックピットに座る上野さん 上野 謹爾さん所蔵

メイド宿舎でモーニングコーヒー

小谷 文昭さん（大野 城市筒井在住）

60 年ほど前（昭和 35 年（1960）頃）、私がまだ小学校に上がる前の園児だった 2 月 16 日、我が家が火事で焼失した。原因はいつも一緒に遊んでいた近所の子どもの火遊びで、私は第一発見者だった。昼頃、敷地内の藁小屋から発生した火の勢いは強く、一瞬で母屋に燃え移った。家のすぐ裏にある筒井の井戸から地域の消防団が腕用ポンプで放水したけど、水の勢いが弱くて火まで届かない。火事が恐ろしくて右往左往する私が見たのは、アメリカ軍のダブルタイヤの消防車が筒井の集落の狭い道を入ってきている姿でした。しかしその消防車も立往生。その火事は隣近所へ延焼し、結局鎮火したのは次の日でした。私は着の身着のまま家具や布団、靴さえもなく、燃えずに残っていた堆肥小屋の隅で、アメリカ軍から貰った毛布で暖を取った。

筒井でもたくさんの米軍ハウスが建っていて、近所の人々が基地の消防署などで働いている人も多かった。

中学生の時、知り合いの紹介で、基地の中の芝刈りのアルバイトをしに、友達と二人で行った。朝、友達と二人で基地の東門に行き、キャプテンを呼んでもらい、まずはメイド宿舎に行った。基地の中にはメイドさんたちの宿舎があり、そこが自分達の休憩場所にもなっていた。そこで分厚くて飲み口の下に一本線が入ったマグカップで、モーニングコーヒーを入れてもらって飲んでた。

基地の芝刈りは、芝刈り機と一人乗りのカートみたいな芝刈り機を使っていた。カートみたいな芝刈り機に入れる燃料がピンク色をしていたのを覚えている。芝刈り機に乗って少し働くと、キャプテンやメイドさんたちが来て、「休憩しなさい。」と言われる。そこでまた、メイド宿舎に行き、クッキーやコーヒーを飲んで休憩していた。休憩するテーブルの上には、常に熱中症対策で塩玉が入ったボトルが置いてあった。日本で熱中症とか言い出したのは最近でしょ。昭和 30 年代の当時に、アメリカでは熱中症対策とか労働環境の管理をすでにしっかりやっていたことを憶えている。

（参考文献）「大文字」『広報大野城』2021 年 2 月 1 日 大野城市発行



綺麗に芝が刈られた基地内の司令官宅の様子
春日市教育委員会所蔵



消火の際に使用された筒井の井戸は板付基地が返還された昭和 47 年に福岡県指定有形民俗文化財になった。

コラム～^{いたづけ}板付基地の^い生き証人^{しょうにん}「^{べいぐん}米軍ハウス」～

^{おおのじょう}大野城市内にはアメリカ兵やその家族が住んでいた「^{てんざい}米軍ハウス」が点在しています。昭和37年（1962）「観光と産業 西日本住宅詳細図」（株）善隣出版社刊行に「外人」、「米人宅」などと記載されている米軍ハウスは大野町だけで384戸以上、建っていたことが分かりました。基地返還から50年が経過し、板付基地の生き証人とも呼ばれる「米軍ハウス」は建物の^{ろうきゅう}老朽化から^あ空き家^やになっているケースが多く、年々その数は減少しています。

そこで大野城市教育委員会ふるさと文化財課では、令和2年（2020）12月から市内の米軍ハウスの戸数を調べる^{こすう}悉皆調査^{しつがいちょうさ}を開始し、現在までのところ43戸を確認しています。また同時に、板付基地や^{しらきぼる}白木原ベース通り、米軍ハウスについて市民の方々に聞き取り調査も実施しています。今だから語れる、あの日の思い出をお話しくくださる方からの情報をお待ちしています。



令和2年（2020）2月に解体された瓦田の米軍ハウス（通称；ソテツハウス）



小谷さんと一緒に筒井の米軍ハウス悉皆調査



松島さんと藤武さんの聞き取り調査

「満壽美をトランクケースに入れてつれて帰りたい」

池田 満壽美さん（大野 城市乙金在住）

私が中学2年生だった昭和38年（1963）、父が家の敷地に2棟の米軍ハウスを建てた。乙金で初めて建った米軍ハウス第1号で、父曰く、近所の関山工務店によって建ててもらった。米軍ハウスの家賃は大家ではなくて、ハウス協会のようなものがあって、そこが家の造りや広さをみて決めていた。うちの米軍ハウスは40㎡あって広かったから、家賃はその当時で7万円くらいだったと聞いている。ハウスを建てるために父が銀行からお金を借りたが、家賃が高かったからお金を返すのも早かった。うちの米軍ハウスが建ってから、近所でも米軍ハウスがたくさん建った。

うちの米軍ハウスに入居したアメリカ人夫婦から頼まれて、ベビーシッターをしていた。アメリカ人夫婦は週末になると、子供達を置いてベースに行っていた。それでベビーシッターをお願いされて、1時間100円で8時間して800円をもらっていた。そのアメリカ人夫婦の友達から「私のところにもベビーシッターに来て。」と言われて、母がうちの米軍ハウスを担当して、私が近所の米軍ハウスに行ってベビーシッターをしていた。中学生で英語を習い始めたばかりで、おまけにネイティブの英語が難しい。アメリカ人の奥さんにベビーシッターの時間を「セプトウリー。」と言われた。時間のことだろうけど、「セプトウリー」が分からない。困っていると、「セプトウリー。」と言って腕時計の針を指さした。それは「7：30（seven thirty）」のことだった。子どもが3人もいると、言う事を聞かない時があって、そういう時はアメリカ人の奥さんが子どもたちに言っていた言葉を真似て、「ユーウォントゥスパンキュー（お尻叩くよ）。」と言ったら静かになっていた。今は改装した部分もあるけど、当時は二層式の小さなタイル張りのキッチンだった。赤ちゃんを風呂に入れるのはキッチンで入れていた。離乳食は瓶詰だし、料理も缶詰とかだからキッチンはいつもきれいだった。アメリカ人家族はいつも茶色の紙袋いっぱい、レシートがものすごく長くてびっくりするくらい、食料品を買ってきていた。室内には長いソファがあって、冬はボンボンボンボン、ボイラーを焚いているから、アメリカ人家族は室内では半袖で過ごしていて。奥さんは外出するときには毛皮のコートをさっと着てね。

アメリカ人のカメラマンさん家族が入居していた時は写真を撮ってくれたり、父と母を「パパさん、ママさん。」と呼んで、「食べにおいでよ。」と言われてスパゲティを食べさせてくれたり、楽しい思いをいっぱいした。子どもに「泊まりに来て。」と言われて、同じベッドで寝たけど、子どもの腕の毛がジガジガして気になって眠れなかった。そのうち、米軍達はアメリカに帰還する時、全員一度横須賀へ戻る事になって、「引き揚げる。」と言っていた。その時に「満壽美をトランクケースに入れてつれて帰りたい。」って言われた。父は「いやいや、まだ学校に行かんといかんから、いかん。」って言って断った。今思えば、ついて行っていたら人生変わったかもなと思うこともある。

私が通っていた大野中学校は白木原ベース通り沿いであって、白木原ベース通りは英語の看板がずらりかけてあって、外車も1軒に1台あり、アメリカンスタイルが羨ましかった。学校の周りにもたくさん米軍ハウスがあった。同級生で同じクラスの女の子が住んで

いる白木原の米軍ハウスに遊びに行って、ハンサムなアメリカ人のお父さん^{まーじゃん}に麻雀を教え
てもらったり、家がクリーニング屋さんのお友達もいた。

私の伯母^{おば}は西戸崎で看護婦^{さいとさき かんごふ}の仕事をしていた時に、日本に来ていたアメリカ兵のポール
と知り合ってね。伯母とポール^{けっこん}と結婚したいと言った時、家族や親せきがみんな反対して
たけど、私の父だけが「人生、どこでどうなるか分かん^{もら}とやけん。」と言って、OKサ
インを出した。伯母がアメリカに渡る前に、住んでいた米軍ハウスで使っていたベッドや
食器などを母と妹達で持って行っていいということで、母と妹達で取りに行った。一番大
きな物は、木製でうす巻きバネで出来たマットとダブルベッドだった。私はそのベッドを
自分の部屋に置いて、寝ていましたよ。外国サイズだから、とても大きいベッドでした。か
わいいティーカップなどを貰^{もら}ってね。家のキッチン^{と だな}の戸棚の上に大事にしまっておいた。と
ころが大きな地震^{じ しん}にあって、戸棚の上にしまっておいた食器が粉々になってしまっ^{たら}て。そ
れでも割れずに残っていたティーカップを大切にしている。

うちの米軍ハウスは今は1棟になったけど、乙金で最初にできて、まだ残っているのは
ここだけになってしまった。天井や壁の塗り替え^{ぬり かわ}などは家族みんな^{きわく}でやっていた。木枠の
ガラス窓やキッチンの棚、押入れなども塗り替えたりはしているけど、そのままにしてい
る。基地^{てっしゅう}が撤収して、アメリカ人たちが引き揚げた後、日本人に貸す為にバスとトイレを
仕切るボックスを作ったり、畳^{たたみ}を入れたりとか変えたところはある。だけど父が建てた米
軍ハウスで、私にも思い出がある。だから、室内や外観^{ふん い き}の雰囲気^{ふん い き}を今も大事にしてい
るよね。



池田さん所有の米軍ハウス



カウンターや飾り棚は建築当初のまま



池田さんが大事にしているカスミソウが描かれた
ティーカップセット。



ティーカップの底部にはエンボス加工で、
「OVEN Fire King WARE38 MADE IN USA」の文字。
1960～1962年製造の耐熱ガラス製。

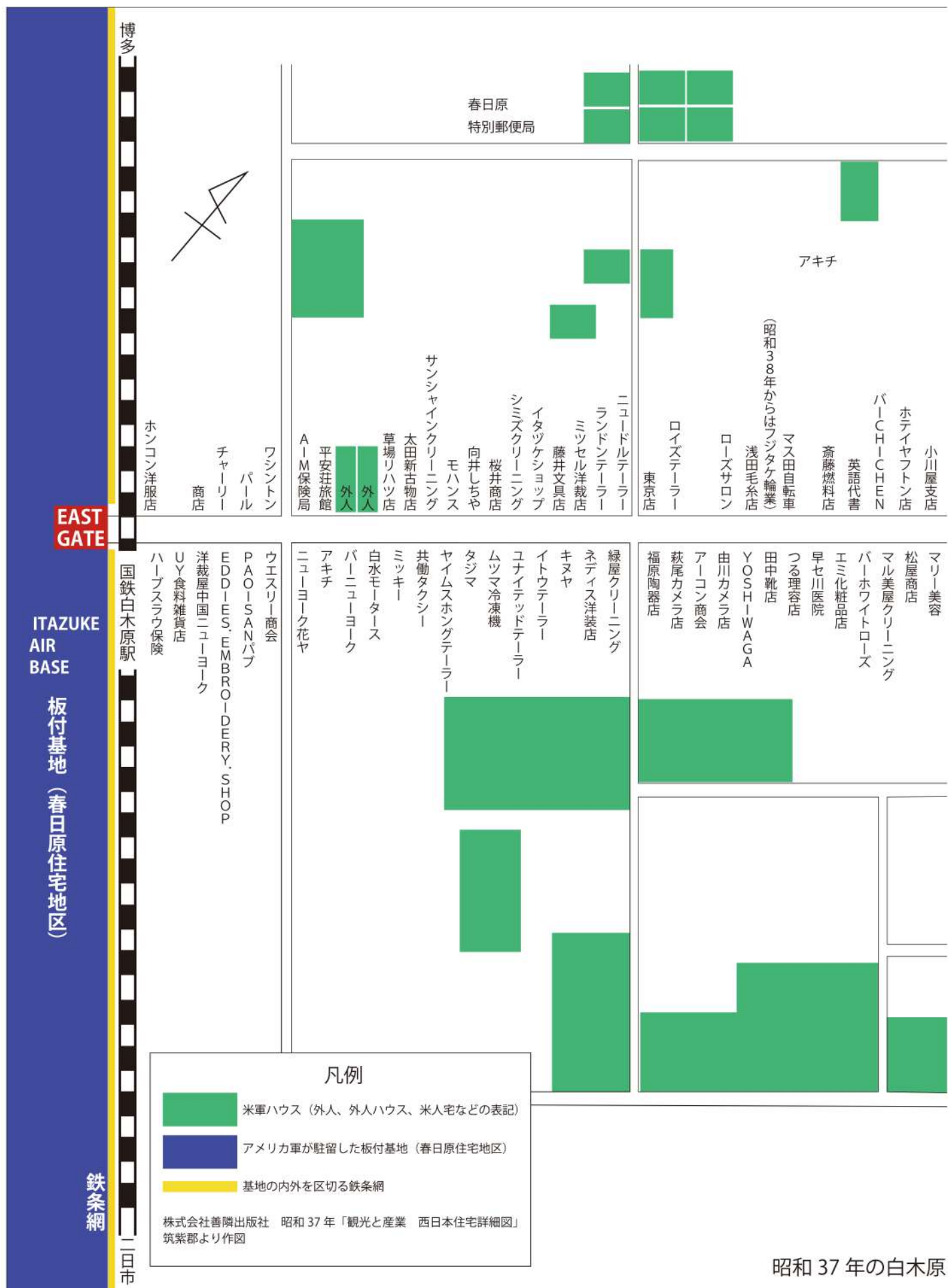


図3 白木原ベース通りの店舗 (昭和37年地図より書き起こし)

しらきばる 白木原は開けた町だった

まつしま かずとら おおの じょうし
松島 一寅さん(大野 城市白木原在住)

私と家族が経営していたスーパーマーケット大黒屋は、終戦後の昭和20年、昔の原病院があった通り(日田街道沿い)で父母が魚屋「大黒」を開いたのが始まり。白木原ベース通りに移転した後、魚屋から総合食料品店となり、再度移転してスーパーマーケットになった。昭和24～25年頃、私が小学校5～6年生頃に大黒屋の棟上げ式があって、2階に上がってから餅を撒いた記憶がある。家は2階建ての建物で、店舗兼住宅だった。昭和30年代には増築して店を拡大した。

当時は何にもない時代だったから、大黒屋は地域の大きな店という存在で、開店した昭和20年代は、野菜や魚、食料品や、ちょっとした日用雑貨、化粧品など手近な物を売っていた。氷も近所のバーとかに配達していた。日本人相手の店が白木原ベース通りでは少ない中、大黒屋のお客さんは、ほとんど日本人で外人相手の商売じゃなかった。

ところが朝鮮戦争の頃かよくわからないけど、アメリカの兵隊さんがうちの店からお菓子を買って、子供に配ることがあった。私も兵隊さんからアメリカのチョコレートバーなどをもらったことがある。その時のおいしかった事が今でも記憶にあって忘れられないよ。

うちの店の隣にはレンガのパン焼き窯があって、コッペパンやあんパンなどをつくって売る坂本パン屋さんがあった。再度移転した先の大黒屋の隣にあったほていやさんは呉服屋さんだった。白木原に来る前は、雁ノ巣の方で商売していたと聞いたことがある。

ベース通りには、クリーニング屋や大きなクリーニング工場もあった。今では当たり前になっているけど、当時の日本は固形石けんと洗たく板でみんな自分でやっていた。アメリカ人にとってクリーニング屋の存在は当たり前だったから、新しい商売としてできたんだと思う。日本人が経営していたマイクさんのレストランも、当時としては珍しい水洗式のトイレ設備だったので驚いた。

ベース通りにあったお寿司屋さんでは、日本人のお姉さんたちがよく食事をしていた。ベース通りには外人相手のバーがあって、そこで働く女性がかかりいた。そういえば、バーで働くお姉さんたちからよく引越を頼まれた。店のトラックで当時の日本人には珍しいベッドなどをよく運んだ。チップをもらった時は嬉しかった。

松桐寿しの隣にあったバーは、黒人相手のバーだった。バーの周辺で黒人と白人が喧嘩していると、気づいた黒人がサァーッと周りから寄ってくる。白人はあまり寄ってこなかった。当時の白人は、黒人相手に接客する女性を嫌がっていたように思う。嫌がるというか、なにかやっぱりそこに垣根があるんだなと思う。本質は今も変わらないようだね。バーとかで喧嘩があったり、なにか事件があれば、基地からジープに乗ってMP(憲兵)が来て、基地の中に連れて行った。基本的には今の警察と同じ。

日本人は基地の中に、自由には入れなかった。基地にはゲートがあって、ゲートの真ん中にある小屋にはMPという銃を持った憲兵がいるからね。独立記念日の盛大な花火大会、

7月4日だったと思う、その日はお祝いをするから日本人も花火見物で中に入ることができた。^{おおづつ}大筒の^{うちあげはな}打上花火とかをうちの店から買って、外人さんが花火をボンボンあげていたことを覚えている。

当時の白木原は開けた町だった。外人もいるし、アメリカの大きな車がいつも通ってた。私が家の2階から道路を見ていたら、将校なんかはオープンカーでね。将校の隣に外国人の若い女性が乗っていて、ショートパンツを履^はいていたよ。中学生^{しょうがきてき}くらいの時だったかな。その時代日本人はもんぺ服ぐらいだったから。色も白いから衝撃^{しょうげき}的だった。

弟が幼児のとき、うちの店の前で、外人さんの車にはねられたこともあった。空中を5～6mくらいポーンと飛んだとかお母さんが話していた。私は見てないけど、後々元気でいたから大きな怪我^{けが}はなかったと思う。

他にも大黒屋の周辺で火事が5～6件あったと思う。その中で、女性の病気があるでしょう？そういう病気の検査をする保健所みたいな、そういう小屋がボロボロで放置してあったから、それが火事になって、うちの店の壁が熱くなって心配したね。

今の白木原ベース通りには当時から残っている店はほとんどない。道を広げるために立ち退き^{ばいしゅん}があって、土地を両方5mずつ取られたからね。売春禁止法、基地の返還それに白木原ベース通り西鉄アンダーパス街路都市計画が起点となって、地元の強い要望により、西鉄駅前整備と再開発、JR 駅前整備、そして西鉄高架事業が現実化となる。また、駅近商業地の高層マンション化などがあって、白木原の町は時代と共に大きく変遷^{へんせん}していくことになった。白木原ベース通りは日本の町とは違う、異質^{いしつ}の町だった。



白木原ベース通りにあったスーパーマーケット大黒屋（昭和47年以前）

商売では金メダルだったと思う

ふじたけ はじめ おおの じょう し しもおおの
藤武 肇さん（大野 城市下大利在住）

自分は佐賀県武雄市の出身で、長崎県佐世保市の自転車店で5年間修業した後、昭和25年(1950)頃から白木原ベース通りの麻生自転車店で働いていた。昭和38年(1963)に、白木原ベース通りのマス田自転車店の後を引き継いで、「フジタケ輪業」を創業した。

店では自転車やホンダのカブ号などを売っていた。カブ号は板付基地の進駐米兵達にも人気で、よく売れた。米兵将校は軍用機にそのままカブ号を乗せていたが、一般の米兵はカブ号を二つに切って、1m真四角の箱に入れて小包にしてアメリカに送っていた。

板付基地の中にはモトクロスバイクレース場があって、レースに出場するアメリカ兵がホンダのCD50というバイクを買ってエンジンオイルの中でクランクのすべりがよくなるようにうちの店で金をかけて改造をした。アメリカ兵はその改造バイクでレースに出て、見事優勝した。その後、アメリカ兵は優勝のお礼にと言って、板付基地の中のレストランでステーキをご馳走してくれた。レストランは映画館の近くにあったと思う。レストランの中は酒を飲むところと、料理を食べるところに分かれていた。アメリカ兵には子供が2人いて、山田にあった米軍ハウスに住んでいて、ハウスの家賃は1万2千円だった。当時、西戸崎にはアメリカ軍専用ビーチがあって、そこに大きなアメ車に乗せてもらって、遊び



基地内で開催されていたバイクレース

貝田 学さん所蔵



上：藤武 肇さんとハービーさん

左：揃いの赤いマフラーでツーリング

藤武 肇さん所蔵

に行った。ビーチで焼いて食べた大きなアメリカンソーセージは味が濃くておいしかった。アメ車はシボレーやフォード、高級車はキャデラックだった。白木原ベース通りは他の道に比べると広くて、陸王^{りくおう}っていう日本のハーレーに乗っている人とかもいた。そのアメリカ兵は本国に帰る時に、スプーンセットをプレゼントしてくれた。

また、ハービーというアメリカ人は軍人ではなくて軍属^{ぐんぞく}だったようで、よく店に遊びに来ていて、仲良くなった。道の向かい側に、呉^こさんが経営しているアーコンテイラー（商会）があった。アーコンテイラーで赤色のマフラーをバイク仲間と揃いで買って、佐賀県武雄市にハービーも一緒になってツーリングに行った。ハービーがアメリカに帰る時には浴衣^{ゆかた}をプレゼントしたり、家でお別れ会をした。ベビーシッターやメイド、自動車の手入れ^{そうじ}や掃除、靴磨き^{くつみが}等、仕事がたくさんあり、たくさんの日本人が働いていた。白木原ベース通りはアメリカの街で、異質だった。

ちょうど時代の流れで板付基地があって、自転車からバイク、バイクから車へと移り変わっていく頃だった。白木原の店の他に、住宅開発が始まった南ヶ丘^{みなみがおか}にも店を出した。自転車を10年連続で年間500台以上販売し、メーカーから表彰^{ひょうしょう}を受けた。あとホンダが発売したばかりのオープンカー・ホンダS800に乗って新婚旅行^{しんこんりょこう}に行ったら、道行く人達にふり返られていた。そのホンダS800はホンダが新婚旅行に乗って行ってくれ^ちと言って、無料で貸してくれた。そのくらいバイクが売れていて、バイク販売数で「地域一番店^{いきいちばんてん}」になった。昭和47年（1972）に板付基地返還後、白木原の店はたたんで、開発が進んでいた下大利にも店を構えた。長男に南ヶ丘の店を任せた今、自分は商売では金メダルだったと思っている。



フジタケ輪業前でバイクに乗るハービーさん

藤武 肇さん所蔵

ラーメンか、チャーハンか、スパゲッティ

田中 泰彦さん(大野 城市 瓦田在住)

航空自衛官だった昭和 36 年頃、24 歳のときに、航空自衛隊岐阜基地から米軍板付基地へ、勉強のために半年間臨時勤務した。今の福岡空港国際ターミナル側にコントロールタワーという建物があった。その 1 階にあるベースオペレーション（飛行場のことを管理する部署）にて、アメリカ兵と一緒に働き、日本人は私一人で、会話は英語だった。当時の板付空港は、航空機の離発着はもちろんのこと、駐機場の使用もすべて米軍管轄下であり、日本航空の航空機は、現在の国内線側の駐機場を米軍から借用して運行していた。時として、日本航空と米軍の話がうまくいかないこともあり、私が代役をつとめることもあった。その後、一旦岐阜基地にかえり、翌年航空自衛隊春日基地に転勤し、再度ベースオペレーションに勤務することになった。26 歳のころに結婚し、大野城市山田の借家に住むことになり、当初は車を持っていなかったもので、飛行場までの通勤は旧 3 号線の山田交差点近くにあった米軍バス停でバスを利用した。春日原発と白木原発のバスが約 30 分ごとに停車していた。もちろん、米軍のバスには普通の人は乗れなかった。

ベースでの昼食は、日本円をドルに換え、ベースオペレーションの隣にあるスナックバーを利用し、ハンバーガーや飲み物を買って食べた。正式にはダメだけど、制服を着て堂々とスナックバーに入っても、米軍人や日本人従業員の人たちは皆面識があり誰も何も言わなかった。

当時、米軍機は F-102 や、F-105、ファントムが展開していた時期で、ファントムが九州大学工学部に墜落したとき（1968 年 6 月 2 日）も板付基地にいた。米軍人が現地に行くと反対運動をしている学生に分かるので、私がかり出され、機体撤収のための切断箇所を見積り、機体を解体して持ってくるため、車に乗りながら道路上の低い電線の高さを棒などで測定した。

基地返還運動が活発だった記憶はほとんどないが、黒人差別問題がアメリカ本国から飛び火した。軍隊はもちろん人種差別はご法度のはずだが、一時期異様な状態だったと鮮明に記憶している。飲み屋街は白人の入る店と黒人が入る店が区別されており、誘われて黒人の店に入ったところ、翌日ある白人から「黒人の店に入っただろう。」といわれたこともある。心ない軍人から「リメンバー・パールハーバー。」や「ジャップ。」と卑下されたこともあったが、終始、毅然とした態度を崩すことはなかったため、多くの米軍人将校や隊員と仲良く仕事することができた。

基地には階級によって区別された、オフィサーズ（将校クラブ）、NCO クラブ（下士官クラブ）、エアーマンズクラブ（隊員クラブ）があり、勤務時間外は飲食をしたり、ビンゴを楽しんだり、コンサート等のイベントが開催されていた。

板付基地は、板付空港が本体で春日原住宅地区は ANNEX（分割地域）であり、航空自衛隊の建物、米軍人住宅、BX（売店）、カミサリー（生鮮食品売り場）、劇場、ボウリング場、プール、グラウンド等の建物や施設があって、基地の東側を「S バー」、西側を

「Kバー」と呼んでいた。Sは白木原、Kは春日原のこと。地域の住民、子どもたちが遊びに来ているのを時々見かけることがあった。

野球（ソフトボール）場が何箇所もあり、シーズンになると長い期間をかけてリーグ戦（ナイター）が行われた。自衛隊からは2チーム（基地と防空管制群^{ぼうくうかんせいぐん}）、米軍からは複数チームが参加し、私は米軍の管制気象チーム^{かんせい きしやう}から出場した。3塁打^{るいだ}を打った自衛隊の同期生と3塁ベース上でばったり出会い、「お前、どうして米軍チームにいるんだ。」と言われたりした。試合は、米軍の家族も観戦、ビールやつまみも持参し、お祭り騒ぎになることもあった。

ある年のクリスマスパーティに、米軍ベースコマンダー（司令官）から着物を着た妻を同伴^{どうはん}しての招待を受け、行ってみたところ、日本人の女性は妻一人しかいない。妻は英語が全くしゃべれない。仕方がないので「私の妻は英語が全くしゃべれないので、みなさま方はせっかく日本に来ているのだから、日本語で話しかけてください。」とお願いした。しばらくたってから妻のほうを見ると、部屋の奥のほうで米軍人の奥さんたちに囲まれていた。何をしているんだろうかと心配になって近くに行ってみたら、その奥さんたちが辞書^{いっしょうけんめい}を手にしながら、一生懸命かたことの日本語で妻としゃべってくれていて、なんとか話が通じていた。

私の自宅にも、仲良くなったアメリカ兵士が奥さんや子どもを連れて遊びに来ることがあった。私がいなくて来ることもあり、妻は英語をしゃべれないので、「相手の顔を見てラーメンか、チャーハンか、スパゲッティを選んで出せば大丈夫。」と伝えていた。妻はその通りに食事を作って食べさせ、米軍人たちは喜んで食べていた。

また、日本人の奥さんと結婚した友人の米軍人が、5歳、4歳、3歳の子ども3人^{ながのけん}を基地内の住宅に残し、夫婦で長野県の奥さんの実家に一週間里帰りすることになり、私の妻にその間子どもの面倒を見てくれと相談があった。5歳の長女が日本語もしゃべるので問題ないと判断して、私たち夫婦（そのときはまだ子どもがいなかった）二人は、基地内米軍住宅に一週間滞在した。妻は冷蔵庫と冷凍庫の食材を使用して食事を作り、私はその住宅から出勤した。あとで笑い話になったが、カレーを作るときに知らずに、本来の肉でなく、だし肉（だしをとるための肉。本来は食べない）を使用したけれども、子どもさんたちはおいしいといいながら食べてくれたそう。



板付飛行場のコントロールタワー（右側が田中さん）

3、白木原ベースの撤収から 50 年、大野城市市制施行からも 50 年

昭和 38 年（1963）、アメリカはベトナム介入を本格化したことで日本に駐留している軍の配置調整を行い、板付基地が中継基地になることを発表しました。この中継化に伴う基地の縮小に対して、大野町ではアメリカ軍の存在が「町発展」に経済的メリットをもたらしている点を重視し、同年 12 月の町議会で「板付基地縮小の問題は当町にとって重大な問題であるから、執行部、議会が一体となり、総力をあげてこれに対処する」との議決が行われました。それは基地周辺整備事業を継続してきた町の事情や町民生活への経済面での影響を考慮した「板付基地の縮小または廃止に対する反対陳情」でした。昭和 39 年（1964）からアメリカ空軍部隊の大半が板付基地から横田基地に移駐し、アメリカ兵やその家族の本国への引き揚げが開始されました。基地で働く日本人労務者の 50% が大量解雇され、大野町は離職者の再就職対策を行うことになりました。昭和 43 年（1968）6 月にはファントム機が九州大学工学部校内に墜落する事件が起きました。周辺市町村を含む「板付基地撤去運動」は大きな流れとなりました。

昭和 47 年（1972）4 月 1 日、板付アメリカ空軍基地返還式にてアメリカ軍基地司令官から運輸省福岡空港事務局長の手に「I T A Z U K E A I R B A S E」の鍵が渡されました。アメリカ空軍管轄の板付基地（板付飛行場）は、福岡空港と改称され、日本の民間空港になりました。同年 6 月 30 日、白木原ベースと呼ばれた板付基地（春日原住宅地区）でも返還式が行われました。太平洋戦争の直後、それまで敵国であったアメリカそのものが板付基地として、地元の地域の中に現れたことは、当時の市民に驚きや当惑を与えました。しかし、基地では多くの日本人が雇用され、市民とアメリカ兵とその家族との交流が進むにつれて、両者の間に信頼や友情が育まれるようになりました。基地が日本に返還され、かつてそこにあったアメリカがなくなっても、大野城市には周辺地域にはない多くの物語が残されました。本書は、基地返還から 50 年が経過し、その物語を聞く機会が少なくなる中で、あらためて当時の貴重な物語を書き留めたものです。これらの物語が個人の記憶を越えて、次の世代に語り継がれ、かつて戦争があったことに思いをはせ、戦争について考えてみるきっかけになればと願っています。

参考文献

- 株式会社善隣出版社 1962 『観光と産業 西日本住宅詳細図 筑紫郡』株式会社善隣出版社
株式会社ゼンリン 1972 『ゼンリンの住宅地図 大野城市 春日市 那珂川町』株式会社ゼンリン
春日市史編纂委員会編 1994 『春日市史 中巻』春日市
石野田 豊 1997 『基地物語』
大野城市立大野中学校選択社会科 1999 『アメリカ軍がこの町にいた頃』大野城市立大野中学校
大野城市史編さん委員会編 2004 『大野城市史 下巻』近代・現代編 大野城市
春日ベース・ハウスの会 2019 『福岡県春日市内の米軍ハウス調査記録 米軍ハウスの世界 ～あのあるところ、春日のまちにアメリカがあった～』春日ベース・ハウスの会
福岡県教育委員会 2020 『福岡県の戦争遺産』福岡県文化財調査報告書第 274 集 福岡県教育委員会
大野城市 2021 「大文字」『広報大野城』2 月 1 日号 大野城市
大野城市教育委員会 2021 『大野城市の文化財第 51 集 大野城市の戦争とくらし』大野城市教育委員会
松野尾 仁美、中野 秀孝、山村 智子 2021 「春日ベース・ハウスの会を中心とした板付基地周辺の米軍ハウスに関する保存調査活動及び地域貢献活動」『第 16 回住宅系研究報告会（2021）論文集』日本建築学会 建築書店

ONOJO CITY CULTURAL PROPERTY

Number 52

THURSDAY.MARCH 31.2022

THIS BOOKLET IS PUBLISHED IN COMMEMORATION
OF THE 50TH ANNIVERSARY OF THE
INAUGURATION OF ONOJO CITY,



Fukuoka Prefecture. There used to be a U.S. air base called "Itazuke Air Base" in Onojo City from 1945 and 1972. In addition to military facilities, there were many houses for the military personnel, movie theaters, club houses, markets, etc. It was an exact reproduction of an American town. The appearance of an enemy American base, in the immediate aftermath of World War II, located within the local community, surprised and perplexed the citizens of that time. However, as many Japanese were hired at the base and the interaction between the citizens, American soldiers and their families progressed, trust and friendship between the two began to grow. Even though the base was returned to Japan, and the United States culture disappeared, many of the citizens of Onojo were left with unique stories and experiences not shared by other towns. 50years have passed since the base was returned, and as the chances of hearing the story decrease, this booklet is a record of the precious stories of that time. We hope that these stories live beyond personal memory and are passed down the generations, giving us a chance to remember that there was once a war that affected everybody's lives.

【表紙】左上「米軍ハウスと子どもたち」貝田 学氏所蔵 / 右上「板付飛行場の一部を借りて運航するすい星号」個人蔵 / 中央「Shreeve Goto 氏のスケッチ」個人蔵 / 左下「白木原ベース通りⅠ」 / 中央下「日本人従業員と米軍人」個人蔵 / 右下「朝鮮半島の軍事境界線を指す軍人」個人蔵

【裏表紙】左上「星条旗新聞の社用車と井上さん」井上 善久氏所蔵 / 中央上「F-80 と軍人」個人蔵 / 右上「F-80」個人蔵 / 中央右「Cpl Neil 1st December 1950 at Pyongyang」個人蔵 / 中央左「Dodge WC51 と軍人」個人蔵 / 左下「白木原ベース通りⅡ」 / 中央下「板付基地のなかで家族写真」貝田 学氏所蔵 / 右下「板付基地で行われたバイクレース」貝田 学氏所蔵

かつて、大野の町にアメリカがあった。

大野城市の文化財 第 52 集

令和 4 年 3 月 31 日

発行 大野城市教育委員会

福岡県大野城市曙町 2 丁目 2 番 1 号

印刷 有限会社 成光社

福岡県福岡市南区大楠 1 丁目 29 番 33 号

